

縮少過程を脱しつつある東南アジア貿易

1

東南アジアの貿易は、朝鮮動乱ブームにより異常な伸長をみたが、この活況は極めて短期間に終熄し、1952年には急激に縮少した。爾來世界貿易が恢復伸長を示したにも拘らず、東南アジアの貿易は却つて縮少均衡化の過程を辿りつつあつた。1954年に至り欧米景気の影響が漸く東南アジアの貿易にも波及し、1955年上期において前年同期に比し、輸出は12.5%、輸入は8.1%の増加を示した。

2

東南アジアの貿易は、極めて少数の原始生産物の輸出に依存している（ゴム、茶、ジュート同製品、米、油料植物、錫、砂糖、綿花の8品目が輸出総額の50~60%を占め、各国はその一乃至二を主要輸出品としている）、これらの輸出が増大すれば、貿易規模も拡大すると云つた事情にある。而してこれ等商品の輸出額の増減は、輸出品量の増減よりも、輸出価格の騰落に懸かるところが遙かに大である。例えばゴムの輸出価格は朝鮮動乱ブーム時にはその前々年の約3倍に暴騰し、これが輸出不振に陥つた1953年には逆に半値以下に下落しているが、一方その輸出数量を見るにその好不況の間における数量振幅は僅か20%を出ていながつた。これは東南アジアの主要輸出品が原始生産物であるため供給の弾力性に乏しいことに基くものである。

今次輸出増加は前記8品目中ゴム、茶、ジュート製品、錫の国際価格が欧米景気の上昇によつて騰貴したため生じたものである。従つて主として右輸出品に依存しているマレー、インド、セイロン、インドネシアにおいて特に輸出が増加している。一方ビルマ、タイ等米穀輸出国は、米穀輸入国における自給度の向上に伴い、その輸出減少の傾向が目立ち、米穀価格は逐年低落している。

かくの如く、アジア貿易が拡大傾向に向いつつあるが、国によつて明暗二相があることが知れる。

一方輸出伸長に応じて輸入増加を図つた国が多かつたので、東南アジア全体としては外貨準備は却つてやや減少した。しかもインドを除き、保有外貨の増加を見た国々においてすらその絶対額は僅少であり、フィリピンにおけるが如く、一度輸入制限を緩和すれば忽ち外貨不安を招く怖れがあるのが一般である。従つて多くの国の輸入政策は極めて慎重で、輸出に見合つて輸入すると云う方針を維持している。

3

翻つて、我国の東南アジア貿易の差当つての見透しを述べれば、タイ等米穀輸出国に対しては米穀輸入の増加を図つて対外購買力の附与に努める必要があるとともに、欧米景気の余波を受けているその他の諸国に対しては、各国の外貨獲得力に応じて輸出を伸しうる可能性があると言える。尤も、これら各国は消費財の輸入よりも資本財輸入を優先せしめる傾向をますます高めつつあり、しかも既に東南アジアを有力な輸出市場としている。西欧諸国は、国内生産の拡大に応じ、さらに積極的な進出をはかつている現状である。

かかる間において、我国が東南アジアを資本財輸出市場として開拓確保するためには、一般的な対策として、我国の輸出能力を昂める一方国内における無用な競争を避けることは勿論、東南アジアに関する市場対策として、特に各国の開発計画に対する参画援助、各国技術者の教育等を含む経済外交の推進、各国の需要を早期、適確に察知する市場調査の実施、輸出後のサービス提供等を不断に行うことが肝要であろう。さらに技術、資本の提携によつて、資本財輸出を促進せしめる方途も忘れてはならない。